

審 議 会 等 の 会 議 結 果 報 告 書

課所名	教育総務課
-----	-------

会 議 名	令和5年度第1回諏訪市総合教育会議
開催日時	令和6年1月24日(水) 午前10時00分 ~ 12時00分
開催場所	諏訪市役所 大会議室
出席者	<p>(出席者) 金子ゆかり市長、後藤慎二副市長、三輪晋一教育長、岩波健一教育長職務代理人、玉本広人教育委員、草間良子教育委員、今井みどり教育委員、荒井英治郎信州大学准教授、前田孝之企画部長、細野浩一教育次長、柳平直章企画政策課長、小林純子教育総務課長、宮阪透生涯学習課長、柿崎茂スポーツ課長、五味裕史すわっちゃオ館長、下澤淳企画政策係長、茅野光徳教育総務係長 (計17名)</p> <p>(欠席者) なし</p> <p>(傍聴者) 4名 ※別紙傍聴名簿参照</p>
資 料	別紙

協議議題(内容)及び会議結果(要旨)

1. 開会

(進行:前田企画部長)

本日の総合教育会議では、諏訪市教育大綱の理念であります「誰もが輝き 誰もが幸せ 新たな時代を切り拓き つながり続ける学びの和」をテーマに、諏訪市教育大綱に基づく令和5年度の取組について報告等いただき、その後、その報告内容に対しましてご参加の皆様より意見交換をお願いしたいと考えてございます。

2. あいさつ

(金子市長)

令和5年度の諏訪市総合教育会議を開催いたしましたところ、本日は荒井先生にご列席をいただきましてありがとうございます。そして教育委員の皆さん、また会議の委員の皆さんにはご参集をいただきましてありがとうございます。また日頃から諏訪市の教育行政に大変なご指導等々いただいておりますことを重ねて厚く御礼を申し上げます。

今の教育の原点となるのは明治時代、学制からスタートしておりまして150、60年という長い歴史がございます。この間を振り返ってみても、時代はもっと短いスパンで大いに変化を続けてきています。そして、我々が今直面しているのは、超高齢そして少子社会であります。18世紀からいくつかの技術革命が起こってきましたけれども、それを凌ぐような大きなデジタル改革、デジタル革命と言えそうですが、そうした渦中にあります。そして、地球の裏側までも瞬時に把握できるというような情報社会になっています。こうした時代の流れもしっかりと捉えて、この先世界の中でこの日本という国を背負って、あるいはこの地域社会においてどのように子どもたちが生きていくのか、いきいきと生きていける、そうした後押しを私達は作っておかなければいけない中という、この原点に立ち返りますと、この総合教育会議、教育のプロフェッショナルの皆さんと、行政、あるいは社会全般の状況を捉えている地域の皆さんの代表者として、市役所において色々携わっている皆さんとのこの話のすり合わせをしながら、子どもたちあるいは地域の教育に取り組む必要があると思っております。そういう意味でこの会議が特に発言の制限もなく、自由に目標に向かって知恵を出しあう会議と捉えておりますので、実のある会議になりますようお

願い申し上げます。

そして令和 5 年度、新しい教育大綱がスタートいたしました。この大綱を作ってくださいましてありがとうございました。私はとても素晴らしい大綱だと思っています。タイトルも中身も本当に一生懸命練ってくださったというふうに思っています。そして小中一貫教育、ソフトの部分も動かしていただき、そしてゆめスクールプラン、推進委員会も 3 回、既に開催していただきまして着実に前進をしていただいているということをお大変ありがたく思っています。教育の問題はソフトからハードまで多方面の問題ですが、この諏訪市にとって大事な柱でありますので、今日はどうぞよろしく願いいたします。

(三輪教育長)

能登半島の大地震の災害の状況ということについては皆さん関心を持っているところだと思いますけれども、今回総合教育会議にあたって、学校教育の分野で少しお話をさせてもらえば、石川県においても全ての小中学校で学校が再開したというふうに聞いております。その一方で、一部の中学生は避難して、そこで学習をする。全体の方向性とする子どもを学びを止めないというキーワードをもとにスタートしているのですが、このキーワード自体は、例えばコロナの中であってもずっとこう言われ続けてきた。そうすると災害も含めて、この時代に、どういふ学びが大切なのか、併せて、学校の役割というのはいふものなのか、改めてその根本に戻って考える機会が多くなっているように思っています。

本日の総合教育会議では、昨年度この会議で決定しました教育大綱に基づいて実際にどんなことが行われているのか報告させていただいて、これからの諏訪市で目指す教育の方向を意見交換し、見極めていきたいと考えています。目指す四つの姿の中には、例えば一つとすれば、みんなが同じペースで同じことを学ぶよりも、多様性を前提としながら、対話によって新たな価値を生み出すことであったり、あるいは自分らしく探究的に学び続けること、こうしたことをこの四つの目指す姿の中に埋め込んであります。そして本年度から諏訪市ではこの教育大綱と同時に、小中一貫校として全ての小中学校がスタートしました。このスタートにあたって、今のような理念を実際にどう実現していくのかということを見えるようにしながら進めていきたいと思っています。そして、教育をソフトとハードというふうに分けた時には、教育内容などのソフト分野を成功させて、そしてこのソフト分野が実際に最適に学べるような環境や施設はどうあったらいいのかというハード分野、これが南部地区でもスタートしていくわけですが、そこにつながっていくというふうなことを考えています。そういう面で教育委員会と首長部局が連携していくことがとても大事だと考えております。本日はその一端を報告してもらいながら、これからの方向性について皆さんで意見交換をしたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

3. 議題

1「諏訪市教育大綱に基づく令和 5 年度取組について」

(荒井准教授)

多くの県内外の自治体でも、教育大綱の策定は、法的に義務はないんですが、それぞれの思いを持った首長そして教育長とが協力をしながら策定していく傾向が確認されております。そこでの大事なポイントはやはり子どもを主体としていくということと、子どもの学びの環境を整えていくということがあるのではないかなと思いますし、そこで前提とされる考え方は当たり前のことでありますけれども、子どもの学び方は多様であるべきであるということですので。先ほど教育長からも話がありましたけれども、自分らしく学ぶということを大人がどう支えるのかというのがとても大事になってくるかなと思っています。今日はそれぞれの取組をお聞かせいただきながら適宜コメント等をさせていただくこともあるかもしれませんが、よろしく願いいたします。

(1) 未来創造こどもゆめプロジェクト実践報告

※別添のとおり

(荒井准教授)

コンパクトに分かりやすくまとめていただいております。色々な自治体と協力をしながらこのような取組をお手伝いさせていただいておりますけれども、市の目指すべき方向性と、先ほどゼロカーボンシティ宣言の話が出ましたけれども、その部分と教育委員会、さらには市役所の各部局と協力をしながら体験や経験を軸に活動を展開している事例というのはあまりないのではないかなと思っています。多くの県内の自治体を見ますと、残念ながら単発で終わってしまうこととか、あるいはプログラムが先にあって、そして子どもたちがそれに興味関心があるものに参加することが多いんですけれども、今回はあくまでもその子どもの思いとか考え方に寄り添っていくということが特徴的だったのではないかなと思います。そこでのポイントは多くの大人や高校生のサポーターも含め、伴走者の存在かなと思っています。強烈な思いや好奇心がある子はたくさんいるわけですが、実はその子たちがもっと伸びしろを伸ばしていくために必要なものは、共に学び合う相手、他者の存在かなと思っています。それが今回正式な形で伴走者として、大人もそうですし高校生の皆さんも継続して関わりを持っていく、ただ単なる他者から人となりとして距離感が近くなっていったのではないかなと思いますので、この関係というのは諏訪市としても財産になるのではないかなと感じました。

もう一つ素晴らしいなと思った点は、ここで学んでいることは学校外でしか学べない経験・体験というように先ほどもお話がありました。確かにその部分もあるかと思いますが、そこで学んだ成果といいますか、経験値を学校の中でもプレゼンテーションする機会を設けていただけた学校もあるということで、これは本人にとっても学校の外での学びの充実だけでなく学校の中での学びのモチベーションもつながってくるのではないかなと思いますので、とても共感的に私としては受け止めさせていただいた次第です。

今後の課題がもしあるとするならば、五つのサイクル(見通しを持つ、話し合う、まとめる、伝える、表現する)というのがやはり非常に難しいものですので、図示すると何となくぐるぐる回るようですが、それぞれのポイントごと、例えば、見通しを持つということ自体ものすごい難しいことです。これは経験や体験が積み重ねられれば重なるほど、見通すことができるわけですので、中長期的な観点から経験の貯金をどんどん積み重ねていくことが必要ではないかなと思いました。感想めいたことが多くなりましたけれども、引き続きぜひ推進していただきたいなと感じました。

※別添のとおり

(3) 単元内自由進度学習の取組

※別添のとおり

(4) ゆめスクールプラン南部地区推進委員会の検討状況報告

※別添のとおり

(荒井准教授)

教育大綱の話と少し関わらせながら、お話しさせていただきます。確実に、教育大綱で掲げているものの具体化に向けても取組を進められていると感じました。

まず一つ目に、小中一貫教育の推進はその必要性を感じながらなかなか難しく、進めていくことに困難を抱えているということも多いわけですが、具体的にそれぞれの学校同士の課題感を共有しながら、進められているということは共感的に受け止めさせていただいたところであります。特に先導的な実践研究として、それぞれのテーマを設定して進められているかと思うんですけれども、今後ぜひ

検討いただきたいのは、それぞれの先導的な実践研究、今回四つの内容がありますけれども、相互に関係してくる部分というのが今後出てくるかと思うんですね。Aというテーマを進める上では、実は特別支援の視点が必要だ、とか、Bということを進める上では、DXの観点からも貢献できることがありうるかもしれない、ということで、学校同士あるいはテーマごとで内容を共有するような場も設けていただくのがいいのではないかなと思っています。施策としてはそういう仕組み作りを進めていただくことが必要かなと思ったのが一点と、もう一点は先生方自身がまさに試行錯誤の中で取組を進めていらっしゃるかと思えますので、実践上の困り感を共有できるような、少しフラットな形で先生方同士が今の悩み等々を共有できるような場も作っていただけたらなと感じました。これが小中一貫教育の取組の部分についての話です。

続きまして単元内自由進度学習の取組に関しては、私たちにとって最適な学びのあり方や学び方はそれぞれ違うという当たり前のことがありますので、それを一つのペースで同じ教材を使って同じように学ぶということに対して限界があると言われてきているわけです。そのようなことを前提とした場合に、やはりもっともっと子どもたちに、これは勇気があることでありますけれども、信じて委ねて、そしてその子どもたちの困り感の変容、変化の具合を、先生方が見取っていくというふうに変わっていけば、学びの場は何か教えられる場だと位置付けから、自分たちから学び掴んでいくということに空間がシフトしていくのではないかなと思っていますので、引き続き自己調整学習という言葉も出てきましたけれども、要は自分で自分の学びをコントロールしていく、これはいわゆる教科における学びを自分のペースで学んでいくということに留まらない概念でして、例えば自分で苦しいことや辛いこととどう向き合っていくかとか、好きなことをもっとより良く進めていくためにはどうしたらいいかとか、計画的に何かやっていく上ではどうしたらいいかとか、他者といろんな葛藤に折り合いをつけていく上ではどうしたらいいかという、広がりのある概念として捉えていったほうがいいのではないかなと感じました。

最後のゆめスクールプランにおける南部地区の部分に関しても、ソフトとハードで分けていただきながら、教育現場の知見を踏まえて、今取り組まれているということですので、引き続き県内の事例もフォローしていただきながら進めていただくとよいのではないかなと感じました。

(岩波教育長職務代理者)

能登半島の地震に当たり、学校は学びの場として学習を止めない努力を行う場所であるとともに、地域住民の方の避難場所としての機能というのも果たしています。地域の拠り所としての立ち位置を改めて考えさせられました。諏訪市においても、万が一の場合に、学校の果たす役割は大きいと思います。子どもたちの学習をきっちり果たした上で、地域の方々の支えになるような立ち位置というものを改めて考えていただければと思います。

今回、探究の大切さや、地域と学校そしてそれを支える保護者という面から少し考えさせていただきました。基本方針の一つに、「自らを拓き、未来を生きる子どもを育てる」とありました。「自ら学び、自らの力で課題に立ち向かう意欲を持った子ども、故郷への愛着を持ちながらも幅広い視野で考え行動できる子どもを育てる教育を推進します。」とあります。これらの提言の中で、探究というワードが重要な意味を持つように思っています。ある辞書によりますと、探究とは、物事の意義・本質などを探って見極めようとする、ある問題や課題に対して積極的に調べて解明しようとする姿勢を表す言葉、とあります。総合的な学習においては、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることが学習の中心概念になっているように思います。探究的な学習は単一の教科にとどまらず、他教科との連携した見方、考え方を結びつけて総合的に活用することや、実社会、実生活においても、課題を探究して自己の生き方を取り続ける考え方の基礎になるのではと思っています。また、自分で問題を設定し、その問題を解決するために情報収集・分析し、意見を交換したり共働したりしながら進める学習活動等もあります。メリットとしまして、まだまだ自由度が高く、自分の興味関心に沿って学ぶことができる、学んだ知識を実際に使って問題を解決することで勉強の意味や社会とのつなが

りを実感しやすくなる、あらかじめ決められた正解がない中で答えを考え出す活動を通じてプロセスを重視する思考力や想像力を養う、他者と共働することでコミュニケーション力や協調性などの社会性が身につく、などが挙げられるとあります。教えてもらうのではなく、自分で問題発見、問題を解決する力を育てる、とことが探究ということになるかと思えます。今、教育は目まぐるしい社会の変化にどう対応するかということが問われているかと思えます。自ら課題を設定し、主体的に判断し、よりよく問題を解決する力を身に付ける探究的な学習は、子どもたちのやる気を育み学びを深める、授業をよくするための重要な視点であるとともに、先行き不透明な現代において将来を生き抜くための基礎体力にも該当する大切な考え方になってくると思えます。

また、地域と学校の連携に関しまして、昨今、少子高齢化や、地域のつながりの減少による地域の教育力の低下、貧困などといった福祉的な課題の増加で学校が抱える問題が複雑化、多様化する中、学校だけでなく社会全体で子どもたちの育ちを支えていくことが求められていると思えます。この点からも、コミュニティスクールに対する期待は大きくなっているものと思っております。そんな中で、コミュニティスクールとPTAの関係、つながりはどうでしょうか？コミュニティスクール活動に期待が集まることはいいことですが、従来からある、そして自分たちの子どもが通う学校に対する保護者の組織であるPTAはどうなのでしょう？地域と学校の連携・協働を効果的・継続的に行うためには、学校運営協議会、PTAとの一体的な連携が求められると思えます。諏訪市においては、従前よりコミュニティスクール活動に力を入れていただいております、私がPTA役員をさせていただいた時期に中洲小学校が文科省型コミュニティスクールとなり、学校の要望に対して多くの地域の方々のご協力をいただいたことを思い出します。中洲小学校の場合は、コミュニティスクールに6つの部会を設けましたが、この組織のもとになったのは、PTAの各委員会の活動でした。例えばPTAの交通安全委員会がコミュニティスクールの安全部会としてPTAとコミュニティスクールの活動をリンクさせ、被ることがないように、また、両者の足りない部分を補填し合って活動を行うよう検討を行いました。PTAで足りない部分を補っていただいたことの 하나가、地域の皆さんの協力による「きよらぶら運動」です。登下校の時間帯、保護者の皆さんの多くは勤務時間帯です。この時間帯の見守りをコミュニティスクールを通じて地域の皆さんにお願いしたところ、現在は学校にまで来ていただき子どもたちの家周辺まで一緒に歩きながら見守っていただく活動になっています。地域の皆さんが学校、そして地域の一員として子どもたちを支えていただいている一つの例ではないかと思えます。しかし、よい面ばかりではないともお聞きしています。あるコミュニティスクールは、地域の皆さんの思いと学校の考えが噛み合わず、険悪な状況に陥ったと聞いたことがあります。両者とも、子どもたちのために、の思いは共通なものですから、思いを円滑にまとめる工夫も必要かと思えます。地域とかが学校が子どもたちの学びの充実のために改めて学校とコミュニティスクールが共働し、活動の評価をしてまた次の取組につなげていく、というPDCAサイクル、またはゆめプロでお話がありましたが、伝えあう力を育む5つの基本的なプロセスを実行していくことがより一層重要になってくるのではないのでしょうか。

昨今、各所でPTA不要論が散見されます。「大変そう」、「なんで私が」、「他にやる人いるでしょう」、「会議行事に参加する時間がない」、「そもそも不要な会議が多い」、「出たくない」等の意見があるようですけれども、自分自身、小学校でのPTA会長、中学校の支部長、PTA会長を務めさせていただいた経験から言えば、学校と子どもたちの間にあるPTAという保護者主体の組織は必要なものと思っております。自分たちの子どもが学び、共同・共働生活を営む学校生活を見ることができ、そして先生方に対して質問意見を述べる場は、保護者にとっても大変貴重な場であると考えます。実際に役員を務めた年度終わりに、PTA役員の皆さんに1年間どうでしたかとお聞きすると、「楽しかった」、「やる前よりも学校や先生方の思いを感じることができた」、「子どもと学校のことを話す機会が増えた」、「保護者同士知り合えて良かった」などの声を聞くことができました。「大変だった」、「時間のやりくりが大変だった」等の声を聞くことはありませんでした。勧誘の方法の再検討などで、もっともっとPTA役員をやっていただける機会

が増えるのではないかと思います。勉強する場が、学校だけでなく家庭を含め多くの場に広がっていく傾向にあるように思います。保護者の PTA 活動を含め、今まで以上に学校とのつながりを密にさせていただき、先生方の考え方を理解し、同じ方向を見る子どもたちに向き合っていたいただければと思っております。今後もぜひ PTA の活動意義を多くの方に理解し、参加していただき、学校コミュニティスクールと共働し、子どもたちがより一層充実した学校生活を送っていただく一助になればいいなと思います。

(玉本委員)

諏訪市の教育大綱に基づいて学校、あるいは生涯学習を通して多様な施策をしていただいております。本当に感謝をいたします。教育大綱は、「誰もが輝き 誰もが幸せ」という言葉から始まっていますが、全ての市民の皆さんが、幸せに暮らせるというのはもちろん素晴らしいことですが、現実には様々な状況や環境、考え方の方がいて、幸せの考え方も人それぞれだと思いますので、今現在幸せでないと感じている方もおられるのではないかと思います。ただこれからの子どもたちは、ぜひそれぞれの人生を幸せだと思う生き方をしてもらいたいと思っています。学校で、あるいは学校外においても幸せマインドを育むことを引き続き進めていただけたらありがたいなと思っています。

学校には子どもたちが集団の中でそれぞれが幸せに暮らすために必要な基本的な生活習慣を含めた自律して学び続ける力を伸ばす場としての機能が求められているんじゃないかと思っています。生活習慣については親の仕事じゃない？というのが学校現場でもかなりあると思いますが、集団の中で周りを見て覚えていく形で先生に頼っている部分は結構あるのではないかと思います。もちろん学校を卒業すれば、ほとんどの方が何らかの職を持ち、社会の一員として活躍をし始めるわけですから、挨拶、約束を守る、人の話を聴く、他人の身になって考える、感謝の念を持つなど、人が社会で暮らしていく中で大切なことを学校の中で失敗もしながら経験を積んでいただいて、社会に飛び出していただきたいと思います。

4 つの中学校区のそれぞれの教育目標、それぞれ表現は違いますけれども、子どもの好奇心ややる気を育て自律して学び続ける人間育成を目指しているものだと思います。何の見返りのためでもなく、自然と行動を起こしたり目の前のものに挑戦しようとするという性質は全ての子どもが持っているという話をお聞きました。その持てる力を邪魔することなく、引き出すように寄り添っていくことがこれから大事なのかなと思ったところです。特に失敗などを恐れるネガティブな気持ちを抑えて前向きな気持ちを持つためのサポートは、経験をした人からの言葉が大きな支えになるのではないかと思います。実際に社会に出ると失敗やミスを起こしてしまうことが多々あります。私はクリーニングの仕事をしておりますが、この仕事に就いたばかりは、特にしみ抜きや特殊技術については、技能や知識の不足から何度も失敗して、お客様にご迷惑をおかけしたことが何度もあります。しかしながら、そこでめげずにこうやると失敗するという経験ができたと考え、さらに技能を磨くことができたと思います。失敗をチャンスと捉えてそこから学びを得ていく姿勢や、現在は能力が足りなくても、努力や訓練によって必要なレベルに到達することができるということを、身近な大人たちが子どもたちに見せてあげられる、就業体験や地域の会社の方の話などを聞く機会も、学校のカリキュラムや校外での授業に取り入れていただきたいと思います。逆に言うと失敗を許容できるように社会も変わっていかなければいけないのかなということを思っています。

元日に能登で大きな地震がありましたけれども、私の仲間数名が、洗濯の支援で先週七尾の避難所に行き、断水のため洗濯ができない皆さんの服をお預かりして、稼働できている近くのクリーニング工場をお借りして洗濯仕上げをしてまたお届けするという活動をしてくれました。私は都合により同行できませんでしたが、活動資金の援助や組合を通してそのような支援活動に対する国の助成をお願いしたり、協力者を募ったりするバックアップ支援をしています。支援の形は人それぞれの事情により違いはあると思うんですが、その根底には被災された皆さんや支援をされている皆さんに対する共感があるのだと思います。是非困っている人、悩んでいる人、頑張っている人に共感する気持ちを持てる人に諏訪の子

どもたちにはなってもらいたいと思います。自律、あるいは失敗体験、そして共感、これからこういうのが大切だと思います。

今日のテーマとは外れますが、石川の中学生在が集団で別のところに移って教育を受けると聞いた時に蓼科保養学園のシステムってそういうとこに活かせないのかなと思ひまして、集団で全く別の暮らしをみんなでするというサポートをしていけないかな、できれば面白いかなと、そんなことも考えさせられました。

(草間委員)

私は一保護者として今の取組の様子を見て、学びの場の変化というのを改めて感じることができました。学校の様子を見たり、関係者の方からお話を聞く機会がある今の私からしますと、進めようとしている個々に応じた学び、探究的な学び、一斉ではなく状況に応じたグループや個人での学びというのは、子どもたちの成長につながっていくものだろうと感じています。ただ、そういった機会の少ない保護者にとってはなじみが薄く、まだよく分からないという感覚があるのではないかと思います。プログラミングの教育などは新しく教科となり受験にも関わるので進めてほしいとは思っても、テストの点や成績といった結果にすぐに表れない新しい授業のやり方には不安になることもあると思います。先ほども PTA の話も出ましたが、保護者が積極的に知ろうとしていかなければいけないということも感じました。そのような中で、子どもたちの学びの場に保護者も関わったゆめプロジェクトの取組がありました。子どもたちの様子を近くで見ていた保護者の方たちは、順を追って学びを深めていることを感じ、このような学びの方法を知っていくことが、今後直面する課題を解決していく力になっていくことを感じたのではないかと思います。活動を進めていく中で分からないことをサポーターの高校生とかだけでなく家族にも相談したということを知りました。見守るだけでなく一緒に取り組むことで、また親自身の学びにもつながったろうと思います。活動後の感想には、ほかの学校の児童、高校生、プロジェクトを支える方とのふれあい、コミュニケーションができたことがよかった、今後も続けてほしい、とあったので、来年度以降も多くの子どもたちが参加し、みんなが学べる場となればよいと感じました。

それから、単元内自由進度学習の取組の様子については、学校を欠席してしまった時でも分からないまま進むことがなくなるのはいいなと感じました。一方で、この授業を保護者として参観したら、自分の子と他の子との進み方の違いに不安になるかもしれないとも思いました。でも、子どもは自分のペースで学んでいるので、進み方が遅くてもきちんと理解できることになり、良いと感じています。内容が理解できていくと楽しくなり、その先に進む意欲も湧いてきます。逆に、先へ進んだけれど前のところの理解が足りないからもう一度戻って学習する、ということもできるかもしれません。先ほど震災のお話もありまして、学校の再開とか避難しての学習という話題がありましたけれども、そういったところだけではなくて、怖くて家族と離れられないだとか、学習に入る気持ちになれないとかいう子もいると思いますので、そういった子でも自分が学習に入れるという思いを持てるまで安心して休んで、心の準備ができたらまた学びを再開できるという形もあるといいなと思いました。

そして、学習スペースも自分に合った形にしている様子がありました。グループだったり1人だったり、隣との仕切りがあったり、廊下を使用したり。自由に自分らしく学べる場所を確保していました。今検討されている新しい学校では、このような形が当たり前になっていくのかなあと感じ、様々な用途に対応できる場ができるのではないかと感じています。そしてそこで学ぶ子どもたち一人一人が幸せを感じられる場所となることを願います。

(今井委員)

私は普段は小学校の学習支援員をやらせていただいています。教員免許がない立場なので、子どもたちの傍らにいる支援をさせていただいていますが、今は、色々なお子さんがいらっやっやっ、一年生で入学してくると初めてのことは全て怖いと思ってしまう子もいるし、落ち着いてその場にいられない子もいますし、喋らずにはいられない子もいて、他の子と関わりすぎるお子さんもいて、逆に全然関わろうとし

ないお子さんもいて、かと思うと関わり方がそもそもわからないというお子さんもいたりします。できそうにないことには取り組もうとしないっていう子もいたり、何か言われてみんなでやろうとしても何をしたいかわからない、困っているのに SOS が出せない子もいて、先生方はとても苦勞をして工夫を重ねて授業を毎日なさっていると感じています。

1年生の体育でも、いきなりサッカーボールを蹴りましようと言うと、多分ボールがどこかへ行ったり混乱して大変だということが多分先生はお考えになって、新聞紙を丸めてテープで留めたボールを作って、それでサッカーのドリブルのような動きをさせるという工夫をしているのを見ました。そうするとボールは痛くないですし、どこか遠くまで転がってってしまうこともないし、他の子とごちゃごちゃになってもボールがどんどん進んでいってしまうわけではないのでちょっと立ち止まってよけるとかそういうこともできて、結果として安心してたくさん動けて運動ができてみんなが楽しかったという授業になっていて素晴らしいなと思ったりしています。

2年生の算数でも、復習問題を解きましようっていう時間があつたんですが、早く終わってしまう子は実は退屈してしまうと思うんですけれども、わからなくて進まなくて困っている子たちがグーで挙手をするそこへ助けに行つて説明をして、大人目線ではないアドバイスができるのでより子どもたちに近いアドバイスができて理解が進んで問題が解けるという場面もありました。支援学級もちろんあつて、さらに特性の大きい、細やかな対応をしなくてはいけないお子さんたちがいらつしゃるんですけれども、一人一人が原級に戻つて学ぶ道徳とかの時間があつて、そういう時に付き添う人手がとても必要になっています。支援員の中でローテーションを組んで付いたりするんですが、時間によっては人手が足りないなあとと思う部分もありますので、コミュニティスクールの学習ボランティアなどに前もつてお願いして付いていただくとか、そういうことで補つていければいいのかなと思います。その支援学級のお子さんだけでなく、クラスの中にも気分を落ち着かせないといけな時間がある子がいたりして、そういう子たちのために、パーテーションとかクールダウンをするテントみたいなスペースを用意することが可能ならばいいなあと考えています。そういう時にも押さえつけるのではなくて、自分でクールダウンをして学ぶ気持ちになつて出てきて自主的に参加できる方向に持っていけたら素敵だなと思っています。

そして、「LITALICO」を、なるべく早く市内の全校に普及させていただいて、支援するっていうことがより具体的に、明確に何か基づくものがあつて実践していけたら素敵だなと思います。

あと、1年生が自分で家庭学習を選ぶという実践をしまして、先生方はプリントを準備したりだとか大変だったとは思つたんですけれども、計算を頑張りたい、漢字を頑張りたい、縄跳びに挑戦する、けん玉の技ができるようにする、絵を描いてみる、絵日記を描く、工作してくる、という中から二つぐらい選んで頑張るものを選んで、子どもたちは頑張ってきました。もつといい加減なのかと思つていたらプリントをたくさんやって綴じて出して廊下に展示されてあつたり、絵が飾られていたり、あと発表する時間というのがあつて、休み明けにけん玉の技を見せてくれて、できるとみんなで拍手が起こつて嬉しそうだったりとか、工作を発表して「おお～」っていう声があつたり、縄跳びも二重飛びができた、喜びにつながるんだなあということを感じました。わくわくする学びを自分で選んで自分の良さを活かせる場面があると子どもたちの自己肯定感というのがとても上がると思うので、素敵だなあと考えています。それ以降も1年生は宿題を自分で選んで決めることになつていて、高学年になつたら無理な部分もあると思うんですけれども、小さいうちに自分が頑張るべきこととか頑張りたいことを見つける力を、選ぶ力をつけていくというのはいいなと思っています。そのためには、そういうことを探究していきたいことがあるときに、教科書や手元にある資料集やドリルなどでは得られないものを図書館の本とか、ビデオとか、教材をたくさん用意しておいていただいて、これを極めたいと思つた時にそれが手に取れるっていう環境が大事かと思っています。今は一人一台タブレットを貸与していただいているので、そこで調べて動画で同じようなものを見ることはできてはいるんですけれども、いろんなものが揃えられていて選べるという環境はやはり大事ななあと思っています。

普通の国語や算数などでも、クラスの中のグループでまとまってグループで考えて意見を出し合ってそれをまとめてみんなに発表することもしていて、そういう時にお互いを理解する、他者を理解することができて共働をしていく力も養われているのではと思います。支援員としてはその場に寄り添っていて困っている子にちょっと一言背中を押すような言葉をかけてあげたりするっていう感じなんですけれども、例えば給食でも完食ができないお子さんいて、量が多いよね、とか味がちょっとここが苦手なんだね、という共感をして、そのあとで私も何歳ぐらいまで食べれなかったかなというような話をして、頑張れて食べた時に一緒に喜ぶことでその子の目の輝きが変わってきたりして、給食で自信がつくと他のことが頑張れるようになって、掃除も頑張ったとか、算数ちょっと嫌だったけど頑張ったんだよ、というお子さんも多いので、日々の生活を丁寧に取り添いながらしていく大人が担任の先生以外にももっといてもいいのかなあと考えています。それはもちろん支援員だけではなくて、地域の皆さんに協力していただいて入っていただくことも大事だと思いますし、いろんな大人といろんなふれあいができるっていうことも大事なかなあと思いました。

(金子市長)

教育委員の皆様には本当に日々様々それぞれのお立場から諏訪市の教育についてしっかりウォッチング、そしてアドバイスをいただいております。今もありがたいご指摘をいくつかいただいたと思っています。

その前に今年度の取組の発表全体を通して感じたことですが、10年くらい前まで、教育現場で起きている様々なことが閉塞感であったり、困り感というか課題だなと思ってどうやって変えていかなきゃならないんだろうと感じていた部分があったのではないかと思いますけれども、新たなこの教育大綱もまとめていただき、取組の中で実際に、こどもゆめプロジェクトにしても、各学校の小中一貫教育の具体的な取組にしても、自由進度学習の取組にしても、今までと違う新たな挑戦に取り組んでいただいている実態を、しっかりと受け止めることができ嬉しく思っています。

私もゆめプロを見させていただいたんですけれども、この発表の中でハッとさせられたのは、学校では経験できないことを経験できた、という子どもの言葉であったり、あるいは考えることについて考えられた、という感想であったり、これを窓口にして考えると、学校って何だろうというところになり、もしかしたらその学びの主体はそれぞれ個々人だと思います。子どもたち一人ひとりであったり大人でもありますけれども、それが学びっていうのは「真似る」という言葉から発していると聞きましたけれども、いろんなことを真似るわけですよ。そうした中で見つけたり、これをやっちゃいけないと思ったりいろいろするわけですよ、その場っていうのはどこにあるかって言ったら、家庭もそうだし、学校もそうだし、社会そのものもそうだし、与えられたこの地球環境のような環境もそうだし、全てが学校だけに限らず学びの場であると、それからそこに主体がいる。そして、伴走者として、先生だったり友人だったり、親であったり、周りにいる社会の人みんな伴走者、という広い概念が見えてきたなっていうのを思います。それで学校という枠、あるいは学年という枠を超えて子どもたちが学べる自由さ、それからそれが、取組の中から本質が見えてくるっていうのが感じられたことが良かったです。一方で、親御さんの心配、テストの成績、将来良い学校に行かせたい、そういう目線が依然としてあること、学校の先生も成績をつけなきゃいけない評価をしなきゃいけない、点数を付けたい、でも点数が付けづらい項目ってあると思います。友達に優しいだとか、努力することだとか、あるいは生き方、どうしたら幸せに生きられるんだろうかっていうセンスだとか、いろんな評価があるはずですが、今まで何か長い期間、画一的な教育の中で染み込まれすぎた。これはやっぱり親御さんも解き放たれるべきだというふうにも思い、そういう気付きもいただきました。企画部の避難訓練で学校を使わせてもらいますけれども、このところ、避難所訓練に生徒たちに参加してもらって一緒にやったんですが、教育というものに対する目線というか捉え方が柔らかくなってきたし、本来学校がなかった時代はそれでも子どもたちは育っていったし学んでいったと思いますけれども、そうしたところにもう一回目線を置いて、将来の世界、我々がわからない社会を生きていく子どもたちがしっかり

幸せに生き抜かれるような、そういう教育を目指していけたらいいなというふうに思いました。

特にこの変化の激しいスピード感がある時代、子どもたちに夢と希望を持って生きてもらいたいと感じたところです。

(荒井准教授)

貴重なご発言の内容、共感的に受け止めさせていただきました。私もいろんな場所で持論としてお話しさせていただいている、子どもの多様化が目に見えるようになってきて、現実のほうが仕組みよりも先行してしまっているという状況がある中で、学校、私達が受けてきた教育が当たり前でないかもしれませんが、そこでの成功体験は現時点で捉えると成功でない可能性も出てきている中で、学校の在り方が根本的に問われてきている時代かなと思っています。そう考えると学校の魅力化っていうのは引き続きすごく重要な内容だと思うんですけれども、子どもを軸とした場合には学習環境をもっともっと魅力化していくことを考える視点が重要なかなと思うんですね。そのように考えた場合には、諏訪市のロゴを見たら「シゼンとヒトがつながる、すわ。」、この自然っていうのは2つかけているんですかね、まさにそのネイチャーとしての自然と、私たちが環境破壊とかも含めて当事者意識を持って取り組んでいくというふうな視点もやはり重要であるとともに、ナチュラルというんですかね、無意識的に私達が人とつながれる環境をここで作っていくということも大切ななという意味で言えば、社会と学校とのつながりを意識的に分けてきてしまったとか、これまでの私たちは学校的な価値観とか、学校ではこうあるべきだ、とかいったものから、柔らかく、境界をすっぱりと分けるのではなくて混ぜながら緩やかな学びの場を作っていけると良いのではないかなと感じました。

(後藤副市長)

教育大綱を具現化する様々な活動の報告をお聞きをして、理解を深めさせていただきました。私も元教育委員会のスタッフとして、改めて諏訪市の教育現場がさらに前に進んでいるなということ、アップデートされているということを感じて、私自身の理解も書き換えていく必要があるということを感じました。先ほど今井教育委員の話の中にあつた低学年の宿題の話、1年生の親御さんにその話を聞いた経験があります。1年生に入学し、しばらく算数のプリントの宿題を毎日簡単な足し算を50問ぐらい、プリントが毎日出されていて、帰ってくるとそれを机に座ってやっていた子が、ある日今日から宿題を自分で決めることになったと帰ってきて、何の宿題にしたかと聞いたら、縄跳び20回。お父さん、愕然としたそうです。本当か？と。縄跳び20回なんてすぐ終わってしまうんじゃないかと思ったけれども、実はお子さんは縄跳びが苦手で、縄跳び20回というハードルはその子にとってはすごく大変なハードルだったそうで、それから毎日縄跳びをやるようになって、お父さんも早く仕事から帰ったときには付き合うようになって、その宿題の意味をお父さんも理解し、その宿題を選んだ子どもの思いも理解ができたという話でした。教育の大きな転換を大人が後押しできるか。伴走者になれるかどうか、特に身内が、親が共に学ぶ他者になれるかは難しいことだと思います。やっぱり口を出したいし、関わりたいと思うんだけど、少し距離を置いた共に学ぶ他者に親がなれるか、またそれを学校も大人がなれるかというのが、諏訪市教育大綱を実現する一つの大きな希望なんじゃないかということを感じていました。

(三輪教育長)

色々お話を伺ってキーワードとして私が受けとめたことの一つは、「共有」、学校間あるいは保護者、地域の皆さん、中学校区ごとで取り組んでいることをお互いに共有するということがとても大事だと思っています。それから「共感」、例えば学校で様々な取組をしている教員の皆さんの工夫だとか、逆に悩んでいるとか、そうしたことをお互いに共感したり、あるいは保護者の思いを共感したり、そして共感から生まれてくる、この共有と共感って大事なキーワードだなということを感じました。

一つだけ、荒井先生にお話を伺いたいなと思っていることがあります。学校が変わっていく中で、その対応する前提として学校そのものが変わる、そして学校は子どもに合わせた学校環境になっていくというのはよく言われていて、理想とするとそういうことだろうなとは思っています。そして、そのためには学

校のシステムそのものを変えていく取組が必要だと。その一つとしては探究の学びみたいなことを広げていって、そして原点が混ざり合うような学習とか、それを実現するような学校環境とか授業の仕組みとか色々あると思うんですけども、この現在取り組んでいる探究的な学びの方向性をもって学校と共有しながら進んでいくこと、だけではないと思うんですが、この話をするとどうしても特別支援教育とか不登校支援とかかなり幅があって、どうしても私どもはその枠を作ってそれはそれぞれどうあったらいいのかとなりがちなんですけれども、そもそもシステム全体の中に取り組んでいったときに、どういうふうなことをこれから考えてそのシステムそのものを考えていったらいいのかを、非常に大きな話なんですけれども思っております。荒井先生が先ほどインクルーシブでフレキシブルな学校環境というふうに仰られていたんですが、どんな方向性で、こんな取組、あるいは今取り組んでいる中でこの方向性をもう少しこんなふうに、というようなことがありましたらお話を伺いたいなと思っております。

(荒井准教授)

壮大な問いをいただいてこちらに探究的に答えないと考えています。私はこれからの学校は、インクルーシブでフレキシブルな学校というふうに言うことが多いんですね。日本においては、インクルーシブが、イコール特別支援学級での学びであったり、特別支援学校のことだと思いがちなんですけども、決してそうではなくて、地域で言うと、教室の中がもっと安心して安全な状況になるように子どもを中心にその環境を作っていくというポイントが一つですし、一人の人間は一つの場所ですと学び続けなくてはいけないというか、同じ場所で学ぶっていうのが当たり前になってますけれども、先ほど教育長のお話にあったように、例えば不登校のお子さんは、もう究極の個別最適な学びを実践されているわけですね、言い換えると。例えば月曜日は A という教室に行き、火曜日はフリースクールに行き、水曜日はちょっと学習塾に行ってみて、そして木曜日はまた学校に行き、というふうに、自分の状況に応じた学びをもしかしたら選択していると捉えるとするならば、むしろ固定観念からかなり解放された学びを実践されていると捉えることもできなくはないわけですね。これは全国均一的な仕組みで生きていくということが当たり前だった私達からすると、なかなか受け入れがたい状況かもしれませんが、現実はそのようになってきているということを考えますと、先ほど副市長のお話もありましたけれども、我々大人がもっと受容的にその状況を捉え、どんな後押しをしていけるのかという方向で物事を捉えて考えていく必要があるんじゃないかということを思っています。

教育長から「共有」というキーワードと「共感」というキーワードが示されましたが、やはり「共働」という言葉もキーワードだと思いました。学校だけが全てを担う限界が来ています。例えば、こどもゆめプロジェクトも教育委員会だけがやってもうまくいかないわけですね。そこでは環境関係のセクションであったり、いろんなセクションが子どものために汗を流して、目的は共有しながらそれぞれの専門性を活かしていくことはまさに共働的な取組ですね。このように本質的に共働という言葉を実質化していくとするならば、学校だけではなくて、学校以外の様々な主体と手を取り合ってやっていく。保護者もそうでしょうし、先ほど PTA というお話もありましたし、地域の公民館活動もそうですし、この諏訪全体を学びの場として位置づけていくことがやっぱり重要ではないかなと思いますし、先生方が新しいことにチャレンジできるような環境を作っていただくとか、これだけ教員不足の話がある中で、働きやすさと働きがいと両立できるような空間作りということをしていく必要が教育行政としてはあるのではないかなと思います。

(三輪教育長)

三つ目のキーワードをいただきましたので、今回の総合教育会議の成果として、今後につなげてまいりたいと思っています。

(金子市長)

限られた時間でありましたけれども、奥の深い、意味深い、良い教育会議になったと思います。諏訪市の未来の教育宣言をしたら、諏訪市全体が子どもたちの学びの場です、諏訪市民全員が、子どもたちの学びの伴走者です、ということかなというふうに感じたところでした。今までの固定観念を、我々

昭和の時代が持っている既存の濃い教育というものに対する殻を、しっかり柔らかくして、そして新たな時代を切り拓く子どもたちにとって、嬉しい教育に転換していきたいと思います。もう既に1年目を実践していただいて、ありがとうございます。この流れは非常に良いと感じました。最後になりましたが荒井先生、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

4. 閉会

(前田企画部長)

荒井先生始め、教育委員の皆様、貴重なご意見を様々頂戴いたしましてありがとうございました。教育は大きな転換点を迎えておりますので、教育行政推進のため、首長部局もしっかり足並みを揃えながらやっていきたいと思っています。

以 上